

ひんからかわらばん

第5号
発行 2015年3月10日
九州教区
東日本大震災対策小委員会



自分の命は自分で守る

―国は国民を守らない
いずみ愛泉教会 布田秀治さん

東北教区が「放射能問題支援対策いずみ」を発足させて、一年半が経ちました。この一月、福岡地区協議会で「いずみ」運営委員の布田秀治さんが講演をしてくださいました。この機会に、本紙にも寄稿いただきました。

映画「放射線を浴びたX年後」(伊東英朗監督)をご覧になった方はいるでしょうか。1954年3～5月に、アメリカがマーシャル諸島のビキニ環礁で6回の水爆実験をしました。第五福竜丸が被爆し、久保山愛吉さんが放射能症で死亡したことで知られています。しかし、第五福竜丸だけではなく、同じ区域で操業していた船が被爆しました。映画はそれらのその後を追い続けたドキュメントです。日本政府は水揚げされた魚の放射線を検査し、廃棄処分しました。ところが、検査開始か

ら10か月、1954年12月31日、日本政府は「すでに検査の必要がない時期に到達した」として放射線の測定を中止しました。日本政府がアメリカから「完全な解決」を条件に200万ドル(当時7億2千万円)の補償金を受け取ったからです。翌日から、すべての魚が水揚げされ、食卓へと運ばれました。アメリカはその後1962年まで100回にもわたって実験を繰り返したのです。アメリカも日本政府も放射能による被曝の危険性については一切口をふさいだままです。

福島県や行政は「除染したから家に帰れる、もう安全、町を復興しよう」と躍起になっています。若い人が戻らないからです。そんな中で、この春から福島県立「ふたば未来学園」という中高一貫校の開設が双葉郡広野町に進められ、開校が予定されています。この構想が公にされた時、新聞では「子どももどらねぼ地域消滅」、「開校が送れるほど戻る子どもが減る」と各町村は危機感を募らせている(2013.5.13朝日)とありました。ところがこの高校の入学試験に120名募集枠に152人の出願がありました(2015.1.24朝日新聞)。子どもはモルモットではないはずですが、やがて病気が発症した時、その子は「運がなかった」、「弱かった」とされるのでしょうか。それとも「因果関係は認められませんでした」というのでしょうか。

いずみは、このような課題に向き合いながら、今、不安な思いに苦しんでいる人、仕事も住宅も、故郷も奪われている人、ストレスを抱え痛み苦しんでいる人に寄り添い、少しでも心安らく状況を提供できるよう活動し続けたいと願っています。どうか、皆さんの力を貸してください。一人でも多くの人にこの活動を知って欲しいと願っています。小さな集会でも構いません。声をかけてください。今回報告の機会を与えていただけたことを感謝しつつ。



支援活動なよう

◆今年度、これまでお寄せいただいた支援献金の総額は五六三、一四六円です。ご協力に感謝いたします。また、続けて支援献金をお寄せくださいますよう、お願いいたします。

◆2月17日(火)、宇野朗子さんをお招きして、「原発事故のなかに―事故4年に想うこと」をテーマに、東日本大震災報告集会を行いました。参加29名。次号かわらばんで詳しく報告いたします。



奥羽教区、岩手沿岸の被災教会を巡り

竹内款一さん(長崎銀屋町教会)

2014年11月17(21日)の5日間、奥羽教区の岩手県、三陸海岸沿いの被災された教会を訪ねさせていただきました。下ノ橋教会、新生釜石教会、宮古教会、千厩教会、大船渡教会、江刺教会と訪ねさせていただきました。

三陸沿岸を行くと、あの震災と大津波から3年半経っても、爪あとの大きさをまざまざと感しさせられます。ここにもあそこにも、人の暮らしがあったのだと、壊れたものや何も無くなってしまう所から感じながら行きめぐりました。

○新生釜石教会では、直後よりボランティアの方々が集まり、継続的に共に過ごし、働きを共にした方々が



おられました。中には受洗もされた方もおられました。しかし、昨年は心筋梗塞などにより突然天に召された方々がおられたことなどお聞きしました。大きな労苦や様々な想いを共にしながら歩んでおられる方々の様子について、しのばれました。教会の修築がやっとなされ、感謝礼拝を持つ矢先のことでした。そのような中、地道に日々の歩みを積み重ねておられます。



大船渡の仮設住宅

○大船渡教会でも、教会ゆかりの方が仮設住宅に入居しておられ、震災後からボランティア活動の受け入れや様々な活動を共にして来られた方のご家族が急に天に召されることもありました。ただ、地道に地域の人々と共に歩む営みがなされていて、村谷牧師は、他教派の方々とも消息を分かち合いつつ、共に歩まれる姿が印象的でした。また、NPOさんりく・こすもす(障がいを持った方々が生き活きと生活できるように設立された)とも関わりを持っていることも印象的でした。



陸前高田の大規模な盛土工事

○千厩教会は、いち早く移転を余儀なくされましたが、今は新会堂で礼拝を守っております。地域の子どもたちも集うようになりました。特に震災の時、海外の方々の心細さや不安について痛切に感じ、フィリピンのタガログ語礼拝も始まっているようです。

○宮古教会は、教会設立以降、明治三陸津波(1896年)やチリ地震津波(1960年)、その他風水害、そして東日本大震災。度重なる被害に遭って来ました。この度、教会は移転・新築を決断しました。また、関係のひかり幼稚園は、認定こども園として出発することとし、教会とこども園が移転し、同じ敷地で出発します。信徒約10名の宮古教会ですが、大きな決断をし、宮古での宣教と子どもへの教育に關わっていく祈りを持っておられます。工事が

第6次ボランティア派遣中!

現地では様々な賜物が必要とされており、シニア世代の「プラチナ・ボランティア」が喜ばれています。どうぞ、ご応募ください。

派遣先: 東北教区被災者支援センター(仙台市)
派遣期間: 各自でお決め下さい。

ただし 3日以上ワーク可能な方
派遣補助: 教区より一人5万円
作業内容: 外ワーク、仮設住宅での活動、こどもプログラム、夕食ボランティア等

お問い合わせ: 委員長 新堀真之
(香椎教会 092-661-3419)

詳しくは募集要項をご覧ください。

支援献金をお寄せください。

被災された方々と共に歩む活動を、息長く継続しましょう。

中も揺れが起ると、息をのみながら過ごしておられます。内陸部の教会でも、教会の修繕が始まっています。一関教会でも大規模修繕が始まり、江刺教会でも開始する必要があると思います。最近、隣地とその家屋を取得する好機があったようです。今後も、震災後を生きる営みが続きます。

岩手地区では、各教会の祈りの課題を文面に記して明らかにしながら、共に歩む営みがなされています。地区形成のために学ぶべきものを感じました。

三陸を巡って、多く目にするのは、おびただしい土木工事です。津波の後更地になった所では、巨大な盛土

